

書陵部蔵『新古今和歌集注抜書』について

近藤美奈子

一、はじめに

宮内庁書陵部蔵『新古今和歌集注抜書』（函号・桂―九五）は、『新古今和歌集』の古注釈を抜き書きしたものである。『和漢図書分類目録』⁽¹⁾に「智忠親王御筆」とあり、その左に「正保―万治」と注記されている。これによれば、『新古今和歌集注抜書』は智忠親王^{とただ}によって、正保―万治年間すなわち西暦一六四四年から一六六一年の間に書かれたものということである。智忠親王は元和五年（一六一九）十一月一日に智仁親王^{としひと}の第一皇子として誕生された。八条宮（のちの桂宮）第二代である。寛永元年（一六二四）七月に後水尾天皇の猶子となり、同三年一二月親王宣下を蒙る。同六年二月に八条宮を継がれ、寛文二年（一六六二）七月七日に四四歳で薨去された。

父、智仁親王は和漢の文学に造詣が深く諸芸に秀でておられ、特に歌道においては慶長五年（一六〇〇）に細川幽齋から古今伝授を受け、寛永二年にはそれを後水尾天皇に伝えられて御所伝授の道を開かれるなど大きな足跡を遺された。また、持明院基孝から入木道の秘伝を受けた能書家で、桂別業の造管にも優れた才能を発揮された。

智忠親王は実父智仁親王や養父後水尾天皇の薫陶を受けて和歌、和漢の文学、書道、蹴鞠などに優れておられたが、中でも

造園において、智仁親王の桂別業を引き継いで今日の桂離宮に近い姿にまで造り上げられたという業績は広く知られている通りである。⁽²⁾

『新古今和歌集注抜書』は『新古今集古注集成 近世旧注編1』⁽³⁾に翻刻と解題（以下、「解題」と呼ぶ）が収められている。

二、書誌

書型は縦一二・九糎×横一九・九糎の袋綴一冊の横本。表紙は朽ち葉色の無地。表紙左肩に双辺題簽（刷・白色料紙）に墨書で「新古今和歌集注抜書」とある。表紙及び題簽は本文料紙に比べて新しく、後補されたものと思われる。内題も「新古今和歌集注抜書」。本文料紙は楮紙。前後に二丁の遊紙を置き、墨付三〇丁。但し、第一丁表の遊紙左端には内題と似た筆跡で「新古今抄抜書」と書かれており、これが原装の本文共紙表紙ではないかと思われる。なお、末尾の遊紙は虫損が修復されている。本文は第三丁表より始まり一面一行から一八行と不定であるが、一三、一四行が多く、後の丁ほど行数が多い傾向にある。和歌は一首二行書きであるが、最初からの九首と通し番号の12番（二二七）⁽⁴⁾、16番（二九三）、17番（二九六）の和歌は途中から略して書いてあるので一首一行書きである。本文は和歌よりも一字下げて書く。蔵書印は、第三丁表の右上方、内

題と和歌が書かれている上から「宮内省図書印」という朱の方印が押してある。奥書はない。

詞書は掲出されていない。作者名も三首以外には書かれていない。

また、10番(二一八)と11番(二二七)、63番(一一六四)と64番(一一一四)の二箇所で歌順が逆になっている。

三、典拠注

『新古今和歌集注抜書』(以下、『抜書』と呼ぶ)は、『新古今和歌集』の九二首の和歌について増補本『新古今和歌集聞書』から注釈を抜き書きしたものである。

「解題」が『抜書』についての現時点での最も詳しい研究であり、首肯するところが多いが、『抜書』の典拠注については見解を異にするので以下に述べたい。

「解題」には、次のように述べられている。

注のほとんどが、『原撰本新古今集聞書』(荒木尚『幽齋本新古今集聞—本文と校異—九州大学出版会、一九八六年二月)や『新古今和歌集註』(片山享『高松宮本新古今和歌集註』古典文庫第484冊、一九八七年二月)、牧野文庫本『新古今集聞書』(片山享・近藤美奈子『牧野文庫本新古今集聞書』古典文庫485冊、一九八七年三月)からの引用である。その典拠の引用姿勢は、基本的には幽齋本からの引用を主とし、間に合わない場合に限り『新古今和歌集註』或いは、牧野本『新古今集聞書』を用いるというものである。

しかしながら、前述の通り、稿者の調査によると、『抜書』は増補本『新古今和歌集聞書』(以下、『増補本』と呼ぶ)一書から書き抜かれたものである。

さて、原撰本『新古今集聞書』とは、東常縁が作った『新古今和歌集』の最初の注釈書で、二〇〇首の選釈書である。それを細川幽齋が増補して慶長二年(一五九七)三月(奥書)に作成したものが『増補本』であるが、その成立は少し複雑である。幽齋は『増補本』に先立って原『増補本』と想定される書を作成し、それを更に整備したものが現行の『増補本』である。原『増補本』は、原撰本『新古今集聞書』を『新古今和歌集註』によって増補したもので、その増補分のみ『新古今集聞書』が所謂「後抄」である。そして、『新古今和歌集註』は、原撰本『新古今集聞書』とは異系統の牧野文庫本『新古今集聞書』や『新古今注』『新古今抜書抄』等、室町期の新古今注釈九八一首の取り合わせ注である。したがって、現行の『増補本』には、原撰本『新古今集聞書』の他に『新古今和歌集註』の注が取り込まれていることになる。ついでに言えば、牧野文庫本『新古今集聞書』は全四七〇注のうち四〇九注が『新古今和歌集註』に採られている。

このように、「解題」が『抜書』の典拠注としている、原撰本『新古今集聞書』、『新古今和歌集註』、牧野文庫本『新古今集聞書』の三書がすべて『増補本』に取り込まれていることになるので、『増補本』を調査したところ、『抜書』は『増補本』一書から抜き書きしたものであることが判明したのである。

『増補本』には『新古今和歌集』の全巻から選ばれた六一六首に注があるが、『抜書』はそのうち巻二〇釈教部以外の巻か

ら九二首を採っている。その採取状況を示すと次の通りである。括弧内の数字は各巻における『増補本』注の数である。

卷一	春上 4 (31)	卷二	春下 2 (14)	卷三	夏 9 (24)
卷四	秋上 12 (53)	卷五	秋下 5 (26)	卷六	冬 5 (48)
卷七	賀 4 (10)	卷八	哀傷 4 (10)	卷九	離別 1 (4)
卷一〇	羈旅 7 (37)	卷一一	恋一 7 (27)	卷一二	恋二 3 (15)
卷一三	恋三 7 (24)	卷一四	恋四 1 (41)	卷一五	恋五 4 (31)
卷一六	雑上 6 (43)	卷一七	雑中 1 (36)	卷一八	雑下 4 (71)
卷一九	神祇 6 (21)	卷二〇	釈教 0 (50)		

『抜書』は釈教部からは一首も採取していない。『抜書』の最後に位置する注は神祇部末尾の一九一五番である。『増補本』ではこの後に釈教部の注が続いているのに、『抜書』は三二丁表にまだ四、五行の余白を残して筆を擱いている。釈教部には興味がなかったものと思われる。

その他の部からは、一首から一二首と数字にばらつきはあるが満遍なく採取している。一応、『増補本』からの採取比率の高い部から挙げてみると、賀・哀傷、夏、恋三、神祇、恋一、離別、秋上、恋二、秋下、羈旅、春下、雑上、春上・恋五、冬、雑下、雑中、恋四の順になる。

四、和歌掲出・作者名

「書誌」でも触れたが、『増補本』は和歌を全句掲出して、その中に、『抜書』では和歌の三句、四句以降を略して引用掲出

している注がある。それは、1番(二〇)、2番(五二)、3番(五八)、4番(九八)、5番(一五四)、6番(一七四)、7番(一八二)、8番(一九四)、9番(二〇一)、12番(二二七)、16番(二九三)、17番(二九六)である。

これについて「解題」は、「この引用方法には特別大きな意味はなく、「基本的には」「注文に関わる部分までという意識が見られる」とし、また、その基本から外れる、注文の中心語句「軒端の梅」が和歌では略されている2番(五二)、

ながめつるけふはむかしに成ぬとも―

諸花の中にも梅は句をかんじ、色をもてあそぶ物也。杜

子美詩云。梅^{ヘテ}歴^{カク}寒^ス苦^ス一^ス発^ス清香^ス―

を例に挙げて「どの和歌であるか解ればよいという心覚え程度の意識が、このような和歌引用となったと思われる」と述べているが、従うべきであろう。なお、7番(二八二)、8番(一九四)も、2番と同様に和歌では略された部分にある語句が注文で取り上げられている。

ところで、9番までは和歌を一部略して掲出していたが、10番・11番は全句掲出、12番は一部略、13番・14番・15番は全句掲出、そして16番・17番は一部略というように、ここまでは不揃いだった掲出方法が18番以降は全句掲出に統一されている。和歌を一部略して掲出している17番までの間にも、全句掲出の注が五例ある。それらは概ね注文の語句が和歌の後半にあるので全句掲出されている方が注を理解しやすいからだと考えられる。例えば、11番(二一七)を見ると、

きかずともここをせにせん時鳥山田のはらの杉のむら立

山田のはらは伊勢の山田也。こゝをせにせんとは所詮に

せんと也。山田のはらの杉のむらだちは時鳥の鳴所なれば、きかずともこゝをせんに思はんといひて、下の心は同じくはなけといふ心也

とあり、注文は下句「山田のはらの杉のむら立」について多く言及しているので、やはり全句掲出されている方が解りやすいであろう。一部略の17番の次に位置する18番(三四六)、

さをしかの入野ゝ薄初尾花いつしかいもが手枕にせむ

いつしかとは、かゝる秋の野のおもしろきに、おなじくはのこる心なく我おもふ人ともろ共にみばや。いつかさやうに侍らんといへり。手枕にせんとは、まことに枕なごにせんといふ事にはあらず。只へだてなくなれたきの心也。いつしかといふ事、哥によりて心かはるべし。いつしかも神さびぬるか、たのめをく我古寺の苔の下にいつしか朽ん名こそおしけれ

をみると、和歌の四句にある「いつしか」が中心語句として注文の書き出しから再三注釈対象となっており、また、五句の「手枕にせん」にも言及するなど18番の注は四、五句に対して付けられているので、四、五句を略することなく全句を掲出したものと思われる。次の19番(三七五)も初句の「おほあらし」についての注が中心ではあるが、四句の語句「人だのめ」についての言及もあるので、「おほあらしの森の木の間にもりかねて人だのめなる秋のよの月」と全句記したものと思われ、これ以降は全句掲出することにしたのであろう。

さて、このように和歌掲出に際して略したり略さなかつたりと不揃いな所があることやそれが巻頭部分に限られていることから、『抜書』が確固とした方針の下に書き進められたわけ

ではなくて、覚書や草稿的なものとして書かれたことが窺われる。また、前述の2・7・8番のように注釈の対象たる語句が略されている和歌の例なども、「解題」の言う通り「どの和歌であるか解ればよいという心覚え程度の意識」での和歌掲出であり、他人に読ませるといふ意識で書かれたものとは思われない。したがって『抜書』は、智忠親王自身のための覚書として、あるいは草稿的なものとして書かれたと考えられよう。

次に作者名表記について検討したい。『増補本』には作者名が記されているにもかかわらず、『増補本』を書き抜いた『抜書』は三首を除いて作者名を書いていない。ここにも『抜書』の覚書的性格が表れているように思われる。また、これについて「解題」が「ほとんど作者注記がなされていないことから本書の関心が歌人にないことが想像される」と述べているが首肯される場所である。では、歌人には関心がないと思われる『抜書』において何故、7番、67番、70番の三首にだけは作者名が書かれているのであろうか。7番(一八二)を掲げる。

忘れめやあふひを草に式子内親王

伊勢にては齋宮、賀茂にては齋院と申也。いづれをもいつきの宮とよむなり。昔は両宮へ内親王を一人づゝまいらせられし也。賀茂の祭の時かり屋を作、あふひにてかざりて置たてまつるなり。かりねの野べの事をわすれめやとあそばしけるにや。

作者名「式子内親王」は和歌に続けて書かれており、和歌と作者名で一行いっぱい収まっている。この歌は詞書に「齋院に侍ける時、神館にて」とあり、式子内親王が齋院の任にあつた当時の詠である。注文を見ると、齋宮と齋院との共通点や相違

点を述べながら当歌の解釈に及ぶという内容で、大半が齋院に
関するものである。このように7番は、式子内親王が齋院であ
ったところに着目した注なので、当歌が式子内親王の作
であることを示しておくことによって、何故注文が齋院に言及
した内容であるのかを想起しやすくするために作者名を記して
おいたのだと思われる。

67番(一二〇六)にも作者名が書かれている。

かへるさの物とや人の「思^{ながむ}」ふらん

待よながらの有明の月定家

有明のつれなくみえしと云、忠岑が哥をふかく執心せら
れて常に吟ぜられ侍りしと也。待よながらの有明の月、
すがた詞無比類哥なるべし。鳴長明、新古今三首ノ名哥
といひしそのひとつの哥也。

二行書きの和歌の末尾に、作者名「定家」が書かれている。こ
の歌は注文にある通り『無名抄』¹¹²「代々恋中ノ秀歌」に「…新
古今ヲミレバ、我心ニスグレタル歌三首ミュ。イツレトモワキ
ガタシ。後ノ人サダムベシ。」として、「カクテサハイノチヤ
カギリイタヅラニネヌヨノ月ノ影ヲノミミテ」(現存『新古今
和歌集』には見えない)と「野辺ノ露ハ色モナクテヤコボレッ
ル袖ヨリスグルヲギノ上風」(慈円)の二首と共に挙げられて
いる三首のうちの一首である。作者名「定家」を書くことによ
って、「忠岑が哥をふかく執心せられて常に吟ぜられ侍りし」
の主語を明確にして注文を解りやすくしたのであろう。また、
長明が「新古今三首ノ名哥」と褒め称えている歌なので、その
作者名に留意し備忘的に記したものであるとも考えられる。

70番(一二二三)は、和歌「ただたのめたとへば人の偽りを

かさねてこそは又もうらみめ」の歌頭右脇、前行との間に作者
名「慈円」が書かれているが、狭い行間に後から書かれたとお
ぼしく字の端が両行にかかっている。注文は「恋の哥のよみや
うの手本と云哥也。」である。行間に作者名「慈円」が記され
ている理由は、注文で「恋の哥のよみやうの手本」とまで絶賛
されている和歌なので、その作者が誰であるかということに心
を留めてわざわざ書き入れておいたということではないかと思
われる。

このように見てくると、三首のみに見られる作者名は注文の
理解を助けるためや補足として書かれたものだと言えよう。し
たがって、『増補本』から書き抜く際に作者名を省いた『抜書』
においても、注釈理解のために必要と思われる作者名につい
ては残して置いたということではなからうか。

五、注釈の性格

『抜書』がどのような興味関心をもって『増補本』から注を
書き抜いているのかを検討したい。『抜書』の『増補本』から
の採取状況は前掲の通りであるが、それを個々の注について見
ると、『増補本』注を全部書き抜いている注(「全部注」と呼
ぶ)と部分的に書き抜いている注(「部分注」と呼ぶ)とがあ
る。「全部注」注は『抜書』注の九二首中三七首で、約四〇パ
ーセントを占める。歌番号を示すと、7(二八二)、11(二二
七)、14(二五二)、23(四〇一)、24(四一四)、26(四三五)、
27(四三六)、29(四七七)、30(四八一)、31(四九一)、32
(五三八)、33(五五六)、35(五九〇)、36(六五四)、38(七

〇七）、40（七四八）、41（七五四）、42（七六三）、45（八五一）、46（八五九）、48（九〇〇）、50（九三七）、51（九四〇）、52（九五九）、53（九六〇）、54（一〇二五）、55（一〇二八）、56（一〇五二）、57（一〇六一）、61（一〇八二）、64（一一一四）、65（一一九〇）、68（一二一四）、74（二四三二）、78（一四六八）、87（一八七六）、89（一八九四）である。秋上の後半、秋下、賀、哀傷、離別、羈旅、恋一の前半などの部で「全部注」が続いているところもあるが、この三七首の注が何故全部書き抜かれていて他の注が部分的なのかは、「全部注」自体を見ていてもはっきりしない。全部と部分的という、その書き抜く基準がどこにあるのかを確認するために、「部分注」を中心に見ていきたい。

「部分注」の注釈内容を項目別に分類すると、語釈、名所・地名、歌や作者についての批評、景物の詠み様、歌の解釈、詞書、本説・引用詩、本歌・引歌、他書の言説、題やその詠み方、枕詞、五音相通、逸話、序詞、縁語など多岐にわたっている。

項目のうちで数量が一番多いのは語意や語釈に関するもので、四〇例ほどある。例えば4番（九八）の『抜書』注は「朝日かげにほへるは、にほやかなるといふ詞也。香の事にてはなし。」であるが、『増補本』注を掲げると次の通りである。（傍線部は『抜書』部分。以下同じ。）

有家

あさ日かげにほゑる山の桜花つれなくきえぬ雪かとぞみる
白妙にはなのさきみちたるは全躰雪なり。しかれどもゆきならば此日かげに消べきに、猶々色のにほやかに見えたるは花也。されども花とはみえず、あさ日かげに色の

一しほまさりたる雪とならではみえぬほどに、つれなくきえぬゆきかとおもふよしなり。あさひかげむかへるはにほやかなるといふことばなり。日カの事にてはなし。
あさ日かげ句へる山にてる月のあかざる君を山こしにして

これを見ると、注の多くの部分を占めている、歌全体の解釈と万葉集にある本歌の指摘は採っていない。『抜書』に採られた傍線部は、視覚・嗅覚の両意のある「句ふ」が当歌の場合は視覚的意味であることを述べたものである。この「句ふ」の語意に智忠親王の関心があつたことが窺われる。

『抜書』の16番（二九三）について見ると、和歌掲出は既述のように「深草の露のよすがを契りにて」までで、注は「露のよすがは、たよりといふ事也。」とある。『増補本』注は、

撰政殿

深草の露のよすがをちぎりにて里をばかれず秋はきにけり
今ぞしるくるしき物と人またむ里をばかれずとふべかりける

此哥の一句をとりてよめる也。よすがはたよりなり。深草なれば露をたよりにかれず秋のくると読り。

であるが、『抜書』では、『古今和歌集』（在原業平）・『伊勢物語』四八段の「今ぞしる：」の和歌、及びその第四句をとって当歌を詠んだとの指摘や歌意についての注文は採っていない。そもそも「今ぞしる：」という証歌に関する注文に興味がなかったから『抜書』では和歌の四句以下を掲出しなかったとも考えられるが、ともかく、『抜書』は「よすが」という語の意味にのみ関心があると思われ、傍線部に言葉を補って解りやすく

して採っている。

34番(五六六)の『抜書』注は「あへぬにはあまたの説あり。これは散やらぬ心によめり。」であるが、『増補本』には、

宮内卿

からにしき秋のかたみや龍田山ちりあへぬ枝にあらし吹也
秋のかたみや龍田山といへるは断の字の心に読り。散残
る紅葉は秋のかたみなるに、それをもあらしのふくはか
たみをもたつと也。あへぬにはあまたの説あり。これは
散やらぬの心によめり。

とある。『増補本』は傍線部以外の注文も適切だと思われるに
もかかわらず、『抜書』はそれを採らずに傍線部のみを採って
いる。『抜書』は歌の解釈そのものには興味がなく、言葉の意
味とその使い方に興味関心があると思われる。

80番(一五五二)は、次に掲げる『増補本』の傍線部を採っ
ている。但し「あつまる義」は、『抜書』では「あつまる心」
となっている。

平忠盛

すだきけむむかしの人は影たえて宿もる物は有明の月
すだくはあつまるの字也。おほくあつまりたることな
り。遍照寺むかしさかへし時は月よ花よと人もとひ侍
り。ふり行にしたがひて人は影せず月のみもり侍るよ
といへり。

あぢさいの下葉もすだく螢をば四ひらの影をとふにぞ
有ける

駒とめて麓の野辺を尋ればをぐらにすだくくつは虫か
な

これもあつまる義也。但哥によりて虫などの鳴方によ
めるも侍るべきにや。

『抜書』が採っているのは「すだく」という語に関する部分で
ある。「すだく」には「あつまる」と「虫などの鳴く」という
両意があるが、当歌では「あつまる」の意味であると注し、引
用されている二首はその証歌として挙げられているものである。
因みに、一首目の歌は『拾遺愚草』の定家歌「あぢさいの
下葉にすだく螢をばよひらの数のそふかとぞみる」の訛伝であ
ろう。二首目は『堀河百首』匡房歌「駒なべてふもとの野べを
たづぬれば小倉にすだくくつわ虫かな」であるが、『夫木和歌
抄』では注文と同じく初句が「こまとめて」となっている¹³。さ
て、この歌の詞書は「遍照寺月を見て」である。『抜書』は、
詞書を踏まえた歌の解釈の部分は採っていない。やはり、忠盛
歌そのものよりも、用語「すだく」の方に興味関心があると思
われる。

43番(七八八)「玉ゆらの露も涙もとゞまらずなき人こふる
宿の秋風」(定家)を見ると、『増補本』には「玉ゆら」「露も
涙もとゞまらず」の語釈・詞書・『新撰朗詠集』を引いての解
釈・「長高くこまやかなる躰かぎりなくあはれふかし。」の評
・俊成の返歌等、この歌の理解・鑑賞に関わる詳細な注文があ
るが、『抜書』が採ったのは「玉ゆらとは、露の枕ことばなが
ら少といふ事也。」のみである。『抜書』は、歌の解釈などで
はなく、歌の用語の方に興味関心があると言えよう。

44番(七八九)「露をだに今はかたみの藤衣あだにも袖を吹
あらし哉」(秀能)も『増補本』には、詞書・「藤衣」の語釈
・歌意が書かれているが、『抜書』が採ったのは「藤衣」につ

いての語釈、「藤衣には二様有。一は服衣。一は山がつなどのそさうなる衣を云也。此哥は服衣也。」である。複数の意味をもつ語についての興味関心が窺われるが、同様の例は前掲の4番「匂ふ」、34番「あへぬ」、80番「すだく」を始めとして幾つか見られる。

他にも『増補本』から証歌や歌意・解釈に関する注文を省いて語釈部分のみを採っている例がある。これらも掲出されている歌の理解・鑑賞には興味関心のないことが窺われるが、語釈の用語を歌番号とともに掲げると、12番（二二七）「田子」、13番（二三〇）「葉守の神」、15番（二八二）「行合の空」、20番（三八七）「すゞ吹」、37番（六九四）「ひま行駒」、71番（一二九四）「かねごと」、75番（一四三四）「こりずま」などである。これらの用語を見ると、作歌や解釈に際して注意すべき言葉ということに着目されたもののように思われる。

語釈の次に多く書き抜かれている項目は、歌枕・地名である。「全部注」にあるものも含めると二三例で、「全部注」に「山田のはら」「さよの中山」「久米路の橋」「石川やせみの小川」の四例、「部分注」に「まきもくの檜原」「しがの花園」「おほあらきの森」「若松原」「とふの浦」「なぐさのはま」「武隈」「なだの塩屋」「香椎宮」の九例があるが、智忠親王がこのような歌枕・地名に関心のあったことが知られる。「部分注」九例のうち四例（波線部）は、これまで語釈部分で取り上げたのと同様に、『増補本』注から歌枕・地名に関する部分のみを書き抜いたものである。1番（二〇）の『増補本』注を掲げる。

家持

巻向の檜原もいまだくもらぬに小松が原にあは雪ぞふる

まきもくの檜原大和の名所也。此哥に春の詞なし。いまだくもらぬと云をかすみのころによめる也。余寒の躰也。

この注は短いものなのに、『抜書』は歌枕の指摘部分だけを採用している。『増補本』の「いまだくもらぬ」の解釈に納得いかないのが傍線部以外を採らなかつたというのではないであろう。例えば10番（二一八）では西行歌「時鳥ふかきみねよりいでにけり外山のすそに声の落くる」についての「おちくるとはとゞまりゐたる心也」という少しずれた語釈、他の箇所でも見当違いと解される注文が『抜書』に採取されている例があるからである。この注の場合、『抜書』は歌枕についてだけ興味を持ったのではないかと思われる。

次に、6番（一七四）について、『増補本』を掲げよう。

あすよりは志賀の花園まれにだに誰かはとはん春の古郷

花園は志賀によみならはし侍り。はなぞのはいづくにても花の木のおほき所をいふべきにや。志賀旧都なれば花はいづくにも有べし。花のときはあればはてたる古郷なれども自然にとふ人も有しが、はなもちり春さへ暮はてはまれの音信もあるまじきと也。世間には此ふるさとを志賀のこといへども、こゝは唯春ゆへの古郷なりといへり。幽玄なる哥なり。この作者の哥に如此。妙不思議おほし。古語云、

主人心安楽花竹有和氣といへり。

『増補本』の注釈内容は適切だと思われるのに、『抜書』は傍線部のみを採る。注文は「花園はしがによみならはし侍り。いづくにても花の木の多き所をいふべき。」（二字重説）「」であるが、書

き抜く際に主語の重複や疑問型の文末「にや」を墨滅にして直しているところに、歌枕についてだけ書き抜くのだという意志が垣間見えるように思われる。79番（一四七五）、82番（一六〇五）も『増補本』には短くはない分量の注文があるが、79番「武隈おもしろき名所也。」、82番「なだの塩やは摂州の名所也。」という歌枕の指摘部分のみを書き抜いているので、ここからこれら歌枕に対する強い興味関心が看取できるのである。

他の項目についても、その項目部分のみを書き抜いている例が八例見られるが、例えば17番（二九六）は次の通りである。

顕昭

水ぐきの岡の葛葉も色付て今朝うらがなし秋のはつ風

葛は余の草よりも早紅葉する物なり。

千はや振る神のいがきにはふ葛も秋にはあへずうつろひにけり

うらがなしとはこゝろかなしといふ事也。表裏の二字を讀時は表の字を面^とによみ、裏の字をうらとよむなり。人の心はおもてはみえぬ物也。源氏に、船人も誰をうらみつらんといへるもおなじこゝろ也。水ぐきの岡むかしより葛をよみ侍るなり。

水ぐきの岡のあさぢのきりぐす霜のふりはやよ寒成らん

みづくきのおかの屋かたにいもとあれどねての朝けの霜のふりはもととりたる哥也。

『抜書』は、『増補本』から「葛」について述べた傍線部のみを採っているが、「葛」と歌枕「水茎の岡」とについて述べる

波線部の注文は採っていない。「水茎の岡」も歌枕として有名であるけれども、智忠親王の関心は歌の「葛葉も色付て」と「秋のはつ風」との関係の説明する傍線部のみにあつたと思われる。5番（一五四）の『抜書』は、「花散^テ在^レ根^ニ鳥^ノ飯^ニ舊^ニ巢^ニ」という注文である。『増補本』では次のようである。

寂蓮

思ひたつ鳥はふるすもたのむらんなれぬる花の跡のゆふぐれ

春になりはなも盛なる時は鳥などもあつまりさへづり興に興をそふる物なり。花もちりて鳥の声もまれなる夕暮の花の木かげに独たゝずみて、鳥はかへる所有とたのみてやかへるらん、我は此はなのかげよりほかにたのむかたなし、さていかにせむとあきれたる躰いふばかりなき事也。此作者のうたに此すがたおほし。執心してよまれし也。絶妙の哥也。古詩云、

花散在根鳥飯旧巢といへり。

注文の「鳥」は「鶯」とした方がよいかもしれないが、『増補本』注は概ね適切だと思われる。しかし、『抜書』は歌の解釈や評については興味がないと見え、歌句「鳥はふるすもたのむらん」の典拠であろうか、古詩（出典未詳）だけを採用している。

3番（五八）は、五音相通の項目部分のみを採った例である。

寂蓮法師

今はとてたのむのかりも打侘^マておぼる月夜の曙の空

たのむたのも五音相通なり。用所によりてをくなり。いまはといふ詞は雁のかへらんとするきは也。さらでも春の明ぼのはなごりおほきに、霞に月の残たる時分なれば

帰雁の声も一しほ残おほきやうにきこゆれば、心なき雁も名残をおしむかといへり。かりものもの字、我打侘たるこゝろなり。感情ふかくあはれさかぎりなき哥なり。この『増補本』注も適切な解釈などが述べられてるにもかかわらず、『抜書』が採っているのは、作歌や解釈に役立つ知識だと思われる五音相通を指摘した傍線部のみである。

70番（一二二三）は、『増補本』では次の通りである。

慈円

たゞたのめたとへば人の偽をかさねてこそは又もうらみ

哥のよみやうの手本と云哥也。たゞたのめとは我心をわれとせめていへる也。心は能きこえ侍り。此たとへば、世俗に、たとへば何と有ともかく有ともなどいふがごとし。

『抜書』は傍線部のみを採り、その前に「恋の」を補っているが、「四、和歌掲出・作者名」でも取り上げたように、この注では例外的に作者名「慈円」を補ってもいた。『増補本』と比較して『抜書』の注文を見ると、『抜書』は「たゞたのめ：」の歌についての理解ということよりも、「たゞたのめ：」の歌が「恋の哥のよみやうの手本と云哥」であるという歌学的知識の方に關心があることが分かる。

このように、『抜書』「部分注」のうちでも或る項目部分のみを書き抜いた注を見てくると、それが意図的に書き抜いたものであることが確認できたと思われる。したがって、複数の項目を含む「部分注」においても、その項目の選択は智忠親王の意図が反映していると言えるであろう。「部分注」の中でも長

文で『増補本』注をほぼ採っているものについて、『増補本』から省かれた部分を見ると、18番（三四六）は歌全体に関する説明の一文、21番（三九三）は題や作者の批評など、39番（七三七）は証歌、84番（一七九七）は詞書などの項目である。18番は不必要とも思われる一文であるが、39番の証歌は現代の新古今注釈でも用いられているものである。これら省かれた項目部分だけを見ていると省かれた理由が判然としないが、既述のように、興味関心のある項目だけを採用するという「部分注」の採取基準に照らしてみれば、智忠親王の取捨選択の網から漏れて必要とされなかったと考えるよりほかにないであろう。とすれば「全部注」は、例えば51番（九四〇）のように見当違いな証歌についての注文が含まれているものもあるが、ともかく「全部注」の中にある項目全てが必要と認定されたものということになる。

五、おわりに

以上、幾つかの観点から『抜書』を検討してきたが、そこからは次のようなことが言えよう。

まず、書誌で述べたように、現表紙は後補で、現在は遊紙になっている、遊紙の第一丁が原装の本文共紙表紙だと推定されること、一面の行数が不定であること、巻首部分における和歌の掲出句数が不揃いであることなどから『抜書』は、一定の方針の下できちんと作られた本ではなく、覚書や草稿的なものだと思われる。

また、「部分注」の検討を通して、そこに採られている項目

が意図的に選択されていることが明らかになった。そして、その項目は、掲出されている新古今歌の理解・鑑賞に資するものよりも、作歌・鑑賞に役立つ歌学的知識を得るためのものが圧倒的に多いことが確認できた。但し、「全部注」について見ると、「全部注」三七首のうち二二首には歌意・解釈の項目も含まれているので、『抜書』に新古今歌そのものについての興味関心があることは勿論認められねばならないであろう。

したがって『抜書』は、『増補本』を教科書にして、新古今歌の理解・鑑賞を深めたり、作歌などに役立つ歌学的知識を得たりするために智忠親王が作られた覚書・草稿的なものであると結論づけられよう。

【注】

- (1) 『和漢図書分類目録』(宮内庁書陵部、一九五二年)。
 (2) ①『日本人名大事典(新撰大人名辞典) 第四卷』(平凡社、一九三七年初版、一九七九年覆刻版)。
 ②『国史大辞典 第一〇卷』(吉川弘文館、一九八九年)。
 ③ 小松茂美『日本書蹟大鑑 第一四卷』(講談社、一九七九年)。
 ④同『日本書蹟大鑑 第一七卷』(講談社、一九七九年)。
 (3) 『新古今集抜書(宮内庁書陵部本)』(『新古今集古注集成 近世旧注編1』、笠間書院、一九九八年)。翻刻と解題は田中幹子氏執筆。『抜書』の引用は本書に拠るが、写真版も適宜用いる。
 (4) 以下、算用数字の「〇番」は『抜書』の通し番号を、括弧内は『新編国歌大観』の歌番号を示す。

- (5) 「解題」には『増補本新古今集聞書』と書かれているが、その後配布された「新古今集古注集成 正誤表 近世旧注編1」に拠って、『増補本新古今集聞書』を『原撰本新古今集聞書』に訂正して掲げることとする。
 (6) 『増補本新古今集聞書(内閣文庫本)』(『新古今集古注集成 近世旧注編1』(笠間書院、一九九八年)。翻刻と解題は青木賢豪氏執筆。引用は本書に拠る。
 (7) 近藤美奈子『新古今和歌集聞書』(増補本)の成立について(『甲南国文』第二九号、一九八二年三月)。
 (8) 片山享『新古今集聞書』(後抄)考(『甲南国文』第三二号、一九八五年三月)。
 (9) ①片山享『新古今和歌集註』について(『和歌文学研究』第四八号、一九八四年三月)。
 ②同『新古今和歌集註』解説(『新古今集聞書 牧野文庫本』、古典文庫第四八五冊、一九八七年)。
 (10) (注9)の②に同じ。
 (11) 田中裕・赤瀬信吾校注『新古今和歌集』(『新日本古典文学大系11』、岩波書店、一九九二年)。底本は伝冷泉為相筆本(国立歴史民俗博物館蔵)。
 (12) 『長明無名抄』(『日本歌学大系』第三卷、風間書房、一九五六年)。底本は、天理図書館蔵本(旧竹柏園蔵本)。
 (13) 二首の引用は、『新編国歌大観』(CD-ROM版V. r. 2、角川 書店、二〇〇三年)に拠る。
 (14) (注3)の翻刻では「などいふ事也」とあるが、写真版によって「など」を「少と」に変えた。